

揺れたら逃げる!

防災のまち黒潮町

黒潮町防災ツーリズムのみなさんに聞きました

自分事化のヒントを探しに

2012年3月、黒潮町に激震が走りしました。内閣府から、南海トラフの巨大地震による想定として、最大震度7、最大津波高3.4~4mという数字が示されたのです。長い海岸線に沿って大変美しい景色が広がる黒潮町は、観光とは別の意味で全国から注目される存在になり、その後、町役場の庁舎は高台に移転、町内の各地区では職員が総出で説明会が開かれ、カルテに各戸個別の情報を記入して集計し、大学からも研究者が参加して町全体の防災対策や地区防災計画の取組を進めていくなど、文字通り「総力戦」が展開されてきました。その中で、津波避難タワーが各所に整備され、佐賀地区のものは高さ国内最大級となり、対策を象徴する存在になっています。関連して、黒潮町が出資する形で防災備蓄缶詰を製造販売する会社が設立されるなど、「防災のまち黒潮町」が急速に形づくられていきました。

そして今、町では「防災ツーリズム」が推進され、多くの人々がそのプログラムに参加し学びを持ち帰っています。黒潮町が立ち上がり、これから何を目指しているのか、キーパーソンとも言える方々にお話を伺い、災害リスクの自分事化について考えてみることにしました。

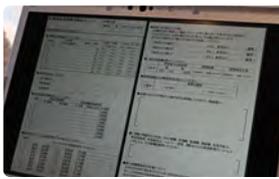


一般社団法人黒潮町観光ネットワーク
事務局長 高石 麻子さん

元は自然環境に関するお仕事をしていましたが、高知県が好きで15年以上前に移住してきた方。観光、防災、町内外の関係者、関係機関の間でコーディネーター役となり、「牽引役になったつもりはないが、役割分担を明確にすることで、みんなが一つのことに進んでいける体制づくりはできた」と、謙虚に今も取組を進めている。「自然は何も変わっておらず、自然の魅力なところ、災害のこと、その両方をみんなが知れば、自然と防災のことも日常化することが面白い」と語る。



黒潮町役場も高台に移転し(2018年)、情報、防災の司令塔を担う(右)。カルテを作成し、各戸の情報を集約、地区防災計画に反映していった(中)。佐賀地区の海岸から鹿島を望む。とても穏やかなところ(左)。



ドレッシングいらずの野菜
(高石さんの推し)



「ビリ」と呼ばれる新鮮なカツオ
(村越さんの推し)



入り野の浜
(砂浜美術館)



黒潮町在詰製作所
黒潮町役場
大規模公園
入り野の浜(砂浜美術館)
佐賀地区
鹿島(高石さんの推し)

高知県黒潮町はこんなところ

黒潮町防災
ツーリズムHP



Sources: Vantor, Airbus DS, USGS, NGA, NASA, CGIAR, GEBCO, N Robinson, NCEAS, NLS, OS, NMA, Geodastystyralsen and the GIS User Community, Vantor

——本日はありがとうございます！ 南海トラフ地震津波浸水想定は、黒潮町に大きな影響を及ぼしたと思います。いわば、逆境の状態から「防災ツーリズム」を展開され、今では全国からの注目を集めています。まず、防災ツーリズムとして展開しようと思われた動機や経緯を教えてくださいませんか。

丁寧ニーズを把握

視察急増にどう対応するか

高：2012年の津波浸水想定後、避難タワー建設のようなハード整備があり、黒潮町が情報防災課を中心に町全体で実施している対策が進んで、防災が町民にとって日常化されてきた流れの中で、佐賀地区の津波避難タワーが国内最大級であることから、行政視察が増えました。情報防災課の方で、人員や時間がかかり必

要になったようです。そこで、佐賀地区の自主防災会が、自分たちが案内できるのではと手を挙げてくれたのです。これだけ町に視察が来てくれているのに、食事もせずに戻ってしまうのはもったいないと、そういう発想で観光と防災のかけあわせになりました。防災ツーリズムのパンフレットも、最初はMICE(※)のパンフレットとして作られたものです。

それから、2019年に「防災ツーリズム検討会」が立ち上がって、大学の先生方がお越しになり、地区ごとの対策のために現地に同行していただきました。そうして、地区の取組をよくお知りになった先生方からも提案をいただき、いろいろな組織が、観光と防災の組み合わせを話し合ってきたのです。

観光の回復策として

村：浸水想定を発表によって、観光産業に

影響が出たのですが、では、どうしたら黒潮町に来ていただけるか？それを考えたときに、黒潮町には大規模公園とスポーツゾーンがあるので、「スポーツツーリズム」を推進して宿泊を伸ばしていきたい。それから、新型コロナウイルスの影響があったのですが、パンデミックも災害の一つと捉えたこと、もあいまって、「防災ツーリズム」につながっていきましたね。

高：浸水想定で教育旅行がキャンセルになり、このままではいけないと、2014年に体験型のプログラムとして「防災学習プログラム」が作られました。当初は、受け入れ者数を伸ばせなかった過去があるようですが、ハード整備や対策が進み、佐賀地区の避難タワーが整備されて視察が急増した後、検討会が発足して何をどうしていくかを決めていき、タワー見学や防災学習を受け入れる中で、参加者にどんなことを学

びたいかアンケートを積み重ねていきました。要望にあわせて、地元の事業者の皆さんや、観光施設の方々に相談し、大学の先生のご意見もいただきながらプログラム化していき、今では、5種類のプログラムになりました。

※Meeting(会議)、Incentive Travel(報奨旅行、研修旅行)、Convention(国際会議等)、Exhibition・Event(展示会、イベント等)の略語



黒潮町情報防災課

課長 村越 淳さん

黒潮町大方のご出身。町の防災対策の中心を担う情報防災課のリーダー。最も大事なことは、「どうすれば人が助かるか!？」で、とにかく「揺れたら逃げる」を徹底することが大事と話し、それが基本的な考え方になっている。大方の山側で育ったが、イチ推しの景色は入野の浜で、地元で「ピリ」と呼ばれる新鮮なカツオが好き(もちろん、お酒も好き)。確かに入野の浜は美しく、そこに巨大な津波が来ることは想像することが難しいが、「自分事化しないと命は助からない」ときっぱり。

国内最大級の津波避難タワー



黒潮町内には6基の津波避難タワーあり、佐賀地区に建設されたものは全体の高さ25mで国内最大級。メディアにもたびたび登場し注目度は高いが、普段はとて静かな所で、住民への配慮が重要であることから、黒潮町としても自由な利用は呼びかけていない。自主防災組織の皆さんが、得たガイド料で備品を補充したり、定期的に避難訓練や点検を行っている。

— 観光の課題に対応すべく始めた取り組みを段階的に拡充していったんですね。すると、現在ほとんどな人が参加しているでしょうか。年間10000人が参加すると公表されていますが、どうでしょうか？

観光を兼ねての参加も

「かかりがま士」による案内が増加

高：防災ツーリズムのプログラムには、黒潮町に入っている大学の先生方の講演がぎっかけだったり、黒潮町のことを調べてきてくれる場合もあります。民生委員の方や消防関係の方が割と多いイメージがありますね。今年度に関しては、大学のゼミや単位がとれる実習で来てってくれています。建設系の方の視察も入っています。皆さん、国内最大級の避難タワーが見たいというのがあります。そのタワーが地域の人々にどう受けとめられているのか、普段からどう活用されているのかわりたいようです。最初はタワー見学だけが多かったのですが、

防災ツーリズムのプログラムに参加したご家族からの写真（自由研究で作成したレポートを持って記念撮影）



自主防災組織「かかりがま士の会」の方々が案内するプログラムの参加者が伸びてきました。今、全体の6、7割ぐらいの割合です。「かかりがま士」は案内をする人の呼び名になっています。（必要以上に世話焼きという意味の佐賀地域の方言「かかりがましい」が由来。住民同士が助け合う防災のことを「かかりがましい防災」と表現している）

村：「かかりがま士の会」の活動のようなものに対しては、他地域から視察にくる議会や行政の皆さんも感心されています。自分たちで案内して、得たガイド料を使って避難タワーの備蓄を充実させていくような循環型の取組をしていて、自分たちのことは自分たちで行うことを実践しています。他の地域でもあまりない活動ではないでしょうか。

家族も観光を兼ねて参加

高：また、観光庁の補助をいただいて立ち上げた防災ツーリズムのホームページが、一般の方も検索しやすくなったことがありますが、総合学習の時間で防災を学んだ子どもが、興味を持って調べたら黒潮町のことが出てきて、家族旅行で来てくれることも増えてきました。夏休みの自由研究にしてくれて、成果のコピーをいただいたりもします。立派なレポートを姉妹で作ってくれた人もいました。

村：そのご家族は、北九州からの参加で、津波のリスクがあまりないところですが、いつどこで津波にあうかはわからない、そ

ういうことを子どもに学ばせたいと、家族の旅行がてらお越しになりました。凄いなと思いますね。

高：一番初めは東京の方でしたが、そういう家族が何家族か来られて、今年も、旅行会社の方が個人旅行でお子さんを連れてきてくれました。黒潮町は怖いイメージがすごく強かったけど、来てみて、地域の人々と話したり、プログラムを受けることで、魅力的な町であることがわかったとレポートに書いてくれて、自分たちも応援してくれている感じがあってすごくうれしかったです。

Check

黒潮町防災ツーリズムのホームページには、各防災プログラムや、モデルツアーの提案などが分かりやすく掲載されている。端的に伝わるコンパクトな動画も掲載されていて、「かかりがま士」による案内の内容もある。伝えることが大切にされている感じがする。



写真提供：一般社団法人黒潮町観光ネットワーク



2016年12月には、黒潮町で「世界津波の日」高校生サミットが開催された(写真は碑文)。



小中学校では、「津波防災教育プログラム」が展開され、地域の学習を入口に災害リスクを自分事化している。

写真出典：黒潮町ホームページ

——素敵なお話ですね。行政視察から始まって、だんだんと参加者の裾野が広がってきたことが分かります。年々、防災に対する社会的な関心が高まっていることも感じますが、プログラムに参加した方々の反応はどうでしょうか。

自然の二面性が伝わっている

高：プログラムそれぞれの感想は異なりま

すが、「防災ツーリズム」では自然の二面性を伝えるようにしているので、防災と自然の両方のプログラムを体験された方は、防災に対する意識が強まりつつも、自然の恵みがあるからこそ、自分でできる範囲の対策が必要であることなど、自然の両面が分かって良かったということをおっしゃいます。

町では防災教育プログラムを推進

村：町としては、防災教育プログラムを作り、小中学校の各学年に応じて、年6回以上の避難訓練、10時間以上の防災教育にしっかり取り組んでくださいと各学校にお願いしています。防災教育においても、防災ツーリズムで大事にしている自然の二面性の話があって、地震・津波のことだけだと自分の町は怖いところだとなってしまうのですけれども、普段は、たくさんめぐみを受けて生活していることが子どもたちにも伝わっていると思います。防災のことを切り口に地域に入っていくわけですが、学校の現場の方からも、地域に愛着を持つようになったとか、他人を思いやるようになったという報告を受けています。普段の学習とは違う面でも防災教育が子どもたちの成長につながっていると思いますね。この取組が継続していくと、みんなが防災教育をうけた町になっていき、防災が特別なものではなく、文化になると思います。

高：地域を学ぶうえで防災は切り離せない

町になっていると思います。地域学で中心になっているのは防災ですもんね。

村：高校でも、大方高校は県立なので町の防災教育プログラムの中には入っていないわけではないのですけれども、防災の取組をされていますし、地域の皆さんと一緒に、小学校や中学校で出前授業のようなことをしてくれて、頼りになる高校になっています。

——実際、文化になってきていますね。それが今後も続いていくことを皆さんは望まれていると思いますが、将来を見据えてお感じになっていることや、課題と思われることはあるでしょうか。

防災が地域の文化へ

次世代への継承

高：「かかりがま士の会」の継承は今後の課題になっています。案内が始まって6年ほ

どになりますが、高齢化で一人引退して、今は3人で行っている中、案内の要望が増えて負担になってきます。次世代を育ててくれないといけないのですが、町の防災教育の最高学年は中学生ですので、すぐに案内人にはなれません。ミドル層は地区外に働きに出ていますし、継承が今、大きな課題になっています。ただ、佐賀中学校のほうからお声がけをいただき授業をしまして、防災ツーリズムの仕組みや、案内人のこと、かかりがま士継承の課題をお話し、自分たちができることを考えてねと、投げかけをさせてもらっています。

——かかりがま士の方々の案内は人気だけに切実ですね。「防災の町黒潮町」が文化になっていくことで、人材育成も循環ができていく様に思いますが、これから先を見据えてお考えになっていることをぜひ教えてください。



かかりがま士が案内する様子。世話をやく＝自分事化を促す人たちがいる。

写真提供：一般社団法人黒潮町観光ネットワーク

「黒潮キャンパス」構想

高：先ほどお話ししたように、最近、大学生の皆さんが多く来てくれるようになりました。これは、黒潮町の魅力を知ってくださった先生方がゼミ生を送ってくれるようになったことが大きいです。そこで、「砂浜美術館」と同じように、建物は建てられなくても、黒潮町が、「黒潮キャンパス」として防災の学び場になったらいいなと思っています。建物がなくても、黒潮町全体がキャンパスになっただけで、資格が取れるとか、単位が認定されるとか、そういう展開になると嬉しいですね。

自分事化なしに命は助からない

村：昨年、NIPPON 防災資産に認定され、認定案件のほとんどが被災した災害の伝承だったところ、黒潮町は、これからの災害に備えていることで認定を受けました。そこに、黒潮町らしさが出ているなと思いい個人的に嬉しくなったのですが、これからの災害への備えは、避難タワーや避難路などハードの整備はもちろんありますが、例えば、防潮堤をつくるとか、すごい防災システムがあつて住民の避難誘導が完全にできるとか、そういう特別なものではありません。私たちが取り組んでいることは、合言葉にもなっている、「揺れたら逃げる」を徹底する、本当にそれだけのことなのです。結局、災害のことを自分事化しなくては命が助からないということです。

——大原則、ですね。そこを本質として、黒潮キャンパスなど今後の展開に期待します！



村越さんイチ推しの景色「入野の浜」。建物のない「砂浜美術館」(すなび)が展開し、エネルギーを要しない観光資源になっている。こういった、持続可能な観光の取組や防災ツーリズムが評価され、黒潮町は、国際認証である「Green Destinations2025」のTOP100に選出された。

裏返したら防災だった

黒潮町の、もう一つ注目を集めている取組に缶詰の製造販売があります。避難所で、アレルギーを気にせず食べられるものを含め、かなり工夫されています。「毎日食べたい非常食Ⅱ日(ひ)常食」がコンセプトのこの取組、これまでの歩みと目指すところを代表の方に伺いました。(以下、まとめ)



株式会社黒潮町缶詰製作所
代表取締役 友永 公生 さん

町の産業政策と津波想定

2012年当時、町政としては、教育、防災、産業、福祉が柱だったので、津波想定を発表で施策は防災が中心になりました。しかし、防災から芽が出る形で、防災教育、要支援者対策など福祉対策が進み、最後、産業が取り残されていたのですが、2013年4月以降、産業振興のテコ入れ策として防災と関連させて缶詰を製造販売することになりました。

缶詰に込められた戦略

2014年会社設立、当初はパウチも選択肢としてあったのですが、備蓄食料としては缶詰が分かりやすく、また、雇用創出を考えてやや高価格帯の、クラフト缶詰を目指しました。食品製造技術と、缶の製造に工業製品のよきな管理技術が必要なのですが、経験者は誰もおらず苦労の連続でした。

贈答品になった缶詰

設立当初の反応はひどいものです。500円の缶詰とはどういうことかと、奇異な目で見られていました。それでも、地域の外で稼いで雇用を産み出したので、商品企画を工夫して、町長とトップセールスしたり、展示会も活用して販路を増やしていき、新型コロナの巣籠もり需要もあって経営目標を達成

しました。高知県内、県外と半々くらいの売れ行きですが、県内の方を中心に、贈答用としての注文が入るようになって嬉しいです。

34mってなんだろう？

私たちはコツコツと成長してきたわけですが、あまり、防災意識向上をさせるためというような売り方はしていません。ただ、カラフルなパッケージに「34mの旗(ロゴ)を組み込んでるので、例えば家庭の中で、「この意味はなんだろうね？」という会話が出たら、しめたものなんですよ。

サイクル全体で意識向上を

黒潮町には多くの原材料はないのですが、米余り対策もあってバエリア(人氣)を作りました。自分が作った食材が町の備蓄品になり、防災教育で使われることで、生産者の防災意識も上がると思います。仕入れ先も広がって、製造↓販売↓消費のサイクル全体で意識向上が図られるといいですね。私は、町職員として防災を長く担当してきましたが、真剣にやればやるほど辛いテーマゆえに、お金を稼ぐことも大事なエッセンスだろうと思います。でも、裏返してみると防災という、そういう取組もあっていいんだろうと思います。



防災ツーリズムのプログラム化もされている。観光コンテンツとしての広がりも作っていきたいとお話も。



備蓄缶詰のセット。備蓄といっても、一つ一つが日常食として工夫され、贈答品にもなっている。



想定最大津波高34mがロゴに。これは一体何だろう？となればしめたものと。

自分事化のヒント

大原則を徹底
(揺れたら逃げる!)

丁寧ニーズを
把握し具現化

世話を焼く
人たちがいる

地域のことを入口に
防災を学ぶ

経済活動の中に
気づきを埋め込む



高石さんイチ推しの風景
(佐賀地区津波避難タワーの背後から鹿島方面を望む)
写真提供:一般社団法人黒潮町観光ネットワーク

どうしたら人が助かるか、揺れたら逃げるを大原則として、地域内外の防災ニーズに丁寧に対応していった結果、防災ツーリズムが確立し発展していました。それは、大学の先生方、地域の事業者の方々、施設関係者、生徒さんたちを含め、「かかりがましい」とまではいなくても、誰かのために何かをしようとする人たちがいて成立しているように思われます。その結果、成果とは断言できませんが、2024年8月に「南海トラフ地震臨時情報」が出た際にも、町内に大きな動揺は見られなかったということです。

一方で、観光や食品といった産業、つまり経済の中に災害、防災に対する気づきが埋め込まれていることや、教育の中でも、地域を学ぶ中で自然の二面性を知ることなど、楽しかったり、普段何気に続いていることの裏側に自分事化のきっかけがあることも、とても重要だと感じられました。

「防災のまち黒潮町」が、ある意味ブランドになった今、それが地域文化として発展していくことで、さらに地域内外、国内外の人々に災害リスクを自分事化し、備えを促していくことが期待されます。

NIPPON防災資産の認定によって、メディアからの注目も高まり、視察が増えている感触もあるという嬉しいお話もいただきました。本当にありがとうございました。